



理想の“青”を求めて



CELADON NOW

Techniques And Beauty Handed Down  
From Southern Song To Today

磁のいま

受け継がれた技と美 南宋から現代まで

2015年6月13日(土) — 8月16日(日)

休館日: 毎週月曜日《ただし7月20日(月・祝)は開館、翌21日(火)は休館》

【プレスリリースのお問い合わせ】 展覧会担当: 森谷・山本 広報担当: 青木・大庭

静岡市美術館 〒420-0852 静岡市葵区紺屋町17-1 葵タワー3F

SHIZUOKA CITY MUSEUM of ART tel. 054-273-1515 (代表) fax. 054-273-1518 www.shizubi.jp

# 青磁のいま —受け継がれた技と美 南宋から現代まで

■会 期：2015年6月13日(土) - 8月16日(日) 【56日間】

■休 館 日：毎週月曜日《ただし7月20日(月・祝)は開館、翌21日(火)は休館》

■開館時間：10:00～19:00 (入場は閉館の30分前まで)

■観 覧 料：一般1,000(800)円、大高生・70歳以上700(500)円、中学生以下無料

\* ( )内は前売りおよび当日に限り20名以上の団体料金

\* 障害者手帳等をご持参の方および介助に必要な方は無料

■前売券：5月1日(金)から6月12日(金)まで販売

静岡市美術館、チケットぴあ [Pコード766-738]、ローソンチケット [Lコード46746]、谷島屋呉服町本店、谷島屋マークイズ静岡店、戸田書店静岡本店、戸田書店城北店、江崎書店パルシェ店、MARUZEN & ジュンク堂書店新静岡店

■主催等

主催：静岡市、静岡市美術館、(公財)静岡市文化振興財団、

NHK静岡放送局、NHKプラネット中部

後援：静岡市教育委員会、静岡県教育委員会

## 雨の日特典

青い空が恋しくなる梅雨の時期。

「雨過天青」の器を見に来ませんか？

雨の日にご観覧いただいた方先着30名に粗品をプレゼントします。

中国に起源を持つ、青緑色を基調とする美しい釉色のやきもの“青磁”。かつて中国皇帝が「雨過天青」とその“青”を喩えるなど、古来より理想の色を求めて様々な青磁が生み出されました。日本には12世紀頃より伝わり、茶の湯の発達のなかで選び出され大切に受け継がれてきました。本展では、第1章で日本に伝来した中国・南宋時代(12～13世紀)の官窯や龍泉窯の名品を、第2章では古陶磁の再現に心を砕き、次第に独自の青磁を作り出した板谷波山や岡部嶺男など11名の近代の物故作家の作品を、第3章では人間国宝の中島宏をはじめ、今を生きる現代作家10名の最新作まで約120点を一堂に展示します。時代を越えて人々を魅了し続ける青磁の“いま”をご覧ください。

## 本展の見どころ

- ① 中国・南宋時代(12～13世紀)の古陶磁を起点に、近代、現代までの青磁の通史を三章立てで紹介する、これまでにない切り口の展覧会。
- ② 龍泉窯の代表作《青磁鳳凰耳瓶》、宮廷用に焼かれた南宋官窯の《青磁盤》をはじめとする名品を出品。板谷波山など近代陶芸の大家が写した「倣古品」との比較鑑賞もおすすめ。
- ③ 現代作品では「青磁」の重要無形文化財(人間国宝)保持者の作品から、オブジェのような「青磁」まで、多様な表現の青磁の“いま”を紹介。会期中は、出品作家のトークイベントなど多彩な関連事業も実施。

## 青磁というやきもの

青磁釉は、灰釉に改良が加えられて進化を遂げたもので、中国を起源とする。1200℃以上の高温で還元焼成すると、釉に含まれるわずかな鉄分が発色して青く見える。なお、酸化焼成されると釉は明るい黄色に発色し、稲穂の色に喩えて「米色青磁」と呼ばれる。初期の青磁はくすんだ緑色や黄色をしていたが、長い時間をかけて発展を遂げ、中国陶磁史上の黄金期とされる宋代に最盛期を迎える。北宋時代の「汝窯」※本展不出品、南宋時代の「官窯」「龍泉窯」は、その美しい釉色から、雨過の澄みわたった空に似ていることから天空のような青さの「天青」、潤いを含んだような淡く明るい青緑色の「粉青」などと形容され、特に好まれた。

中国から日本に伝来した陶磁器の中で、宮廷用の陶磁器を焼いた官窯や浙江省南部・龍泉窯の「青磁」は、室町時代の茶の湯の流行とともに貴重な茶道具の一つとして珍重されました。なかでも、南宋時代の龍泉窯で作られた淡い青色(粉青色)の青磁や、元時代後期から明時代初期の龍泉窯で作られた深い緑色の青磁は、日本では「砧青磁」「天龍寺青磁」と呼ばれ、特に釉色が美しいものとして大切に受け継がれてきました。この章では、後に多くの作り手が手本とし、創作の拠り所とした中国の青磁の名品を紹介します。

### 鳳凰耳瓶 多くの鑑賞者・作り手の心を捉えた器形

鳳凰の形をした特徴的な耳付の花器で、日本には多くの伝世品がある。薄い器胎に、厚く釉掛けされた粉青色が美しい「砧青磁」を代表する名品。

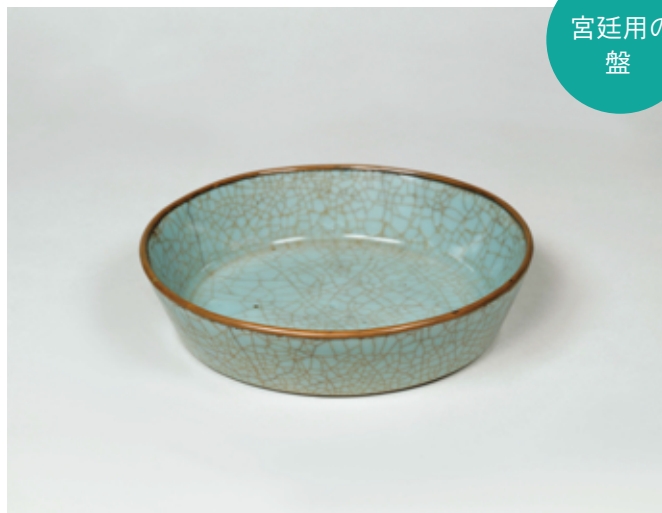
#### 「砧青磁」とは？

南宋時代の龍泉窯でつくられた粉青色の青磁全般をさす言葉。語源に、布を打つ砧の槌の形に似ているからという説、ひびの入った青磁を見た千利休が、謡曲「砧」における砧を打つ響きにかけて名付けたことに由来するとの説もある。

「砧青磁」



《青磁鳳凰耳瓶》龍泉窯 中国・南宋時代 13世紀 東京国立博物館

宮廷用の  
盤

《青磁盤》官窯 中国・南宋時代 12-13世紀 東京国立博物館

### 官窯 二重貫入が特徴的な南宋官窯の名品

垂直に入った褐色の貫入（釉面に生じるひび割れ）と、斜めに入った透明の貫入の二重貫入が見られる。口縁には太い金属の覆輪（補強のための覆い）がはめ込まれている。

「砧青磁」



《青磁輪花碗 銘 鏗》龍泉窯 中国・南宋時代 13世紀 マスプロ美術館

### 龍泉窯 日本人が愛した「砧青磁」を代表する碗

縦に入った亀裂を金継し、さらに鏗で補強している。日本には本作のような鏗で修理された龍泉窯の青磁の名品は少ない。



下蕪形

《青磁下蕪形瓶》龍泉窯 中国・南宋時代 13世紀



袴腰香炉

《青磁袴腰香炉》龍泉窯 中国・南宋時代 13世紀

後に近代の陶芸家が  
写した形

重要  
美術品



重要美術品《青磁刻花花卉文盤》龍泉窯 中国・元時代 14世紀

## 第II章 近代の陶芸家と青磁－写しと創作－

物故作家  
50点  
出品

日本で大切に受け継がれてきた青磁は、明治時代後期から大正、昭和の作り手たちの心を捉え、その作陶に大きな影響を与えました。彼らは、技法を教える師や書も無い中、陶片や資料を求め、作品の実見を繰り返し、多くの写しを試みました。器形、釉色、貫入までもが再現された「倣古品」は、古陶磁再現にかけた陶芸家らの想いの強さを物語ります。本章では、再現を通して培われた技術を生かして、次第に独自の青磁を作り出すようになった物故作家の作品を紹介します。

[出品作家] 11名 初代 宮川香山 / 三代 清風與平 / 初代 諏訪蘇山 / 板谷波山 / 初代 宇野宗壘 / 小森忍 / 河井寛次郎 / いしくろむねまる / おかべみねお / しみずうち / みうらこへいじ / 石黒宗磨 / 岡部嶺男 / 清水卯一 / 三浦小平二

### 初代 諏訪蘇山 「砧青磁」を探求、帝室技芸員としても名を馳せる

(1851～1922)



初代 諏訪蘇山《青瓷風雲花瓶》1919年 宮内庁三の丸尚蔵館

古陶磁の  
“写し”



初代 諏訪蘇山《青瓷鳳凰耳花瓶》1914年 東京国立博物館

静岡会場限定出品

宮内庁の依頼により制作された  
一対の花瓶。南宋官窯風の明るく  
澄んだ淡青色の胴部には雲の  
合間に浮かぶ鳳凰の姿が刻文さ  
れている。

板谷波山 青磁でも多くの優品を遺した近代陶芸の大家

(1872~1963)



古陶磁の  
“写し”

みぞれ  
雲のような細かい気泡の入った  
マット釉の青磁。胴部には、ア  
ールヌーボー様式を取り入れた  
「薄肉彫り」の牡丹文が施され  
ている。東京美術学校で彫刻を  
学んだ波山ならではの技術と個  
性が、青磁作品においても発揮  
されている。

板谷波山《青磁下蕪形花瓶》昭和時代初期 出光美術館



板谷波山《霽青磁牡丹彫文花瓶》1925年 東京国立近代美術館

古陶磁の  
“写し”

古陶磁の再現に生涯を捧げる

初代 宇野宗饗

(1888~1973)



初代 宇野宗饗《青磁下蕪形花生》1953-60年 大阪市立東洋陶磁美術館

小森忍 化学的釉薬研究の先駆者

(1889~1962)



小森忍《青磁魚文手付水注》1921-28年 瀬戸蔵ミュージアム

岡部嶺男 青磁における創作の道を切り開く

(1919~1990)



岡部嶺男《翠青瓷大盃》1968年

透き通るような釉色、美しい二  
重貫入が見事な作品。

「翠青」は「天青」や「粉青」  
よりもさらに透明度の高い釉色  
をさす。岡部自身も気に入って  
いた作品の一つという。

“黄色い”  
青磁



岡部嶺男《窯変米色瓷盃》1970年



清水卯一《青瓷大鉢》1973年 東京国立近代美術館

### 清水卯一 鉄釉陶器の人間国宝、青磁でも高い評価

(1926～2004)

釉面に重層的に入った貫入が魅力。清水初期の青磁の代表作。窯出し後1週間ほどの間「チリチリ、チリチリ」と音を立てながら、無数の貫入が入っていったというエピソードがある。



三浦小平二《青磁色絵曼荼羅大皿》1985年 東京国立近代美術館

### 三浦小平二 青磁で初の人間国宝に

(1933～2006)

大皿の中央にユニークな姿をした菩薩像を、周囲にはレリーフによる風景が施されている。異国を何度も旅した三浦ならではの、独自の個性を放つ青磁作品。

## 第三章 現代の青磁－表現と可能性－

現存作家  
48点  
出品

再現や創作が難しいと言われた青磁ですが、先達たちのたゆみない努力と探求心により技術や技法が解き明かされた今、自身の想いを注ぎ込んだ表現が可能になりました。現代の陶芸家たちは、基礎的な研究をベースにし、それぞれの独自の思考に基づくアレンジを加えながら、様々な青磁作品を創り出しています。この章では、人間国宝から若手作家まで、第一線で活躍する現存作家らの多様な青磁表現を紹介します。

[出品作家] 10名 なかじまひろし たかがきあつし ふかみすえはる かわせしのぶ しんのういわお あおきよたか ふくしまぜんぞう うらくちまさゆき わかおけい つがねひとむ 中島宏／高垣篤／深見陶治／川瀬忍／神農巖／青木清高／福島善三／浦口雅行／若尾経／津金日人夢

### 中島宏 重要無形文化財(人間国宝)「青磁」の保持者

(1941～)

実際に現地へ何度も赴き、一途に青磁を研究してきた中島ならではの作品。中国の青銅器からも着想を得たという突帯状の模様をめぐるせている。

#### 人間国宝とは？

“重要無形文化財「〇〇」の保持者”が正式な表記。「人間が国宝になるようなもの」と、新聞用語として使われ始めたものが全国に広まった。価値の高い無形の技の保存と活用を図り、後世に伝える事を目的とした制度。

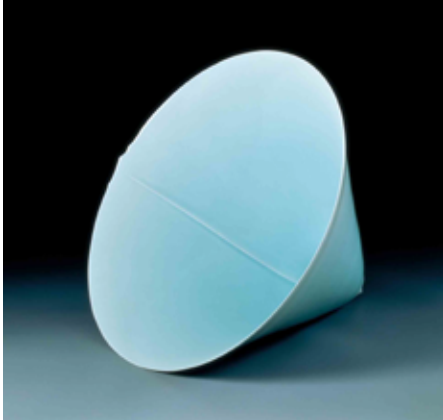


中島宏《青瓷彫文壺》2013年

深見陶治 高さ約2mにもおよぶ青磁の“オブジェ”

(1947～)

深見の作品の特徴である、圧力鑄込みの技法で作られた作品。手びねりでつくった原型を石膏型に取り、そこに泥漿状の磁土を圧力を使って流し込んで成形。その後、表面を削り、素焼き、施釉、焼成といくつもの工程を経て、ようやく完成となる。



深見陶治《宙》1992年 愛知県陶磁美術館

深見は、圧力鑄込みに加え、ロクロ成形も得意として。縁のかすかな広がり、その技量の高さが窺える約60cmの“器”のようなオブジェ。



深見陶治《屹》2012-14年

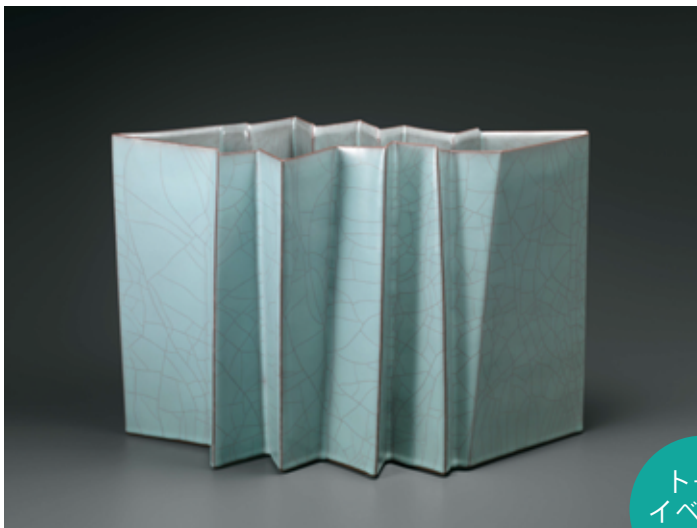


川瀬忍《青磁大鉢》2010年

柔らかさと鋭さを兼ね備えたフォルム 川瀬忍

(1950～)

川瀬は若い頃の古陶磁研究を礎に、身近な自然からヒントを得た独特のフォルムの青磁を発表。左右非対称のゆるやかな造形は、優雅なたたずまいを見せている。



高垣篤《茜青瓷-屹立》2005年 東京国立近代美術館

高垣篤 これまでにない新しい青磁の造形

(1946～)

まっすぐに立ち上がった面が屏風のように構成された様子はそそり立つ壁を想起させる。青磁釉の下に茜色に発色する素材を用い、エッジ部分のアクセントとなっている。

トーク  
イベント  
決定！



神農巖《堆磁線文壺》2012年

トーク  
イベント  
決定！



浦口雅行《青瓷輪刻彫文鉢》2013年

トーク  
イベント  
決定！

## 神農巖 ついで 「堆磁」手法で自然の表情を写し取る

(1957～)

「堆磁」は神農が名づけた技法。「堆」は他よりも盛り上がっている状態をさす言葉で、泥漿にした磁土を含ませた筆で何度も塗り重ねることで立体感のある優美な線文をつくりだしている。

## 浦口雅行 貫入をコントロールして模様を描く

(1964～)

下部に施された線文部分に細かく入った貫入が、まるで模様を施したかのようである。貫入の入りやすい釉薬を用い、釉薬をもコントロールする、浦口が得意とする技法。

## 関連イベント

### 1. 講演会

「青磁一受け継がれた技と美 近・現代陶芸作品を中心に」

日時：7月4日(土) 14:00～15:30(開場 13:30)

講師：唐澤昌宏氏(東京国立近代美術館工芸課長・本展監修者)

会場：当館多目的室

参加料：無料

定員：70名(応募者多数の場合は抽選)

申込締切：6月19日(金) 必着

### 2. アーティストトーク

日時：①6月27日(土) ②7月11日(土)

いずれも 14:00～15:00(開場 13:30)

講師：①高垣篤氏(本展出品作家・陶芸家)

②神農巖氏(本展出品作家・陶芸家)

会場：当館多目的室

参加料：無料

定員：70名(応募者多数の場合は抽選)

申込締切：①6月12日(金) ②6月26日(金) いずれも必着

### 3. 学芸員によるギャラリートーク

日時：7月18日(土)、8月8日(土) いずれも 14:00～(30分程度)

参加料：無料(要観覧券)

申込不要(当日受付前にお集まりください。)

### 4. しずびオープンアトリエ

展覧会に関連したオリジナル創作プログラムを実施します。

日時：8月1日(土)～16日(日) [14日間]

※ただし 8月3日(月)、10日(月)を除く

いずれも①13:30～ ②15:00～(各回1時間程度)

対象：小学生以上 各回15名(申込不要・当日先着順)

会場：当館ワークショップ室

参加料：200円(受付でチケットご購入の上、会場へ)

### 5. しずびチビッコプログラム

小さな子どものためのアート体験プログラム。保護者の方は展覧会をご覧ください。

日時：7月26日(日) ①10:30～12:00 ②14:00～15:30

対象：2歳以上の未就学児 各10名

会場：当館ワークショップ室

参加料：子ども1人につき500円 ※保護者は要観覧券

申込締切：7月10日(金) 必着

※当館HP申込フォームまたは官製はがきに、希望の時間・保護者の氏名・子どもとの続柄・住所・電話(緊急連絡先)・子どもの名前・人数・性別・年齢(月齢まで)を明記

#### [1～2 申込方法]

当館HP申込フォーム(www.shizubi.jp)または往復はがきにて。

1件につき4名様まで。

※往復はがき記載事項

①催事名・催事日②氏名(参加人数分)③年齢④住所(郵便番号から)⑤電話番号、返信面に宛先を記入の上、静岡市美術館まで。

※抽選の如何にかかわらず結果は通知いたします。

#### 静岡科学館る・く・る「青磁のいま」展 関連イベント

A: 科学茶房「青磁のひみつ 一魅力ある“青”が生まれるまで」

日時：6月21日(日) 14:00～15:30

講師：浦口雅行氏(本展出品作家・陶芸家)

B: 「青磁釉作りに挑戦! 丹波青磁の小皿を作ろう」

日時：8月5日(水) 13:00～15:00

講師：市野秀作氏(兵庫陶芸美術館 陶芸指導員)

※詳細は静岡科学館るくるHPをご覧ください。

※A: 5/23(土) B: 7/11(土) 9:30より受付開始

静岡科学館る・く・るへ電話申込(TEL:054-284-6960) 申込順



#### 同時開催

「陶芸家・高垣篤の器にいける花展」6月26日(金)～6月28日(日)

葵タワー 1F 入場無料

主催：いけばな小原流 静岡支部 濱村真弓(1級家元教授)

協賛：葵タワー管理組合法人